

『本朝皇胤紹運録』文徳天皇の皇子女の項には、賜姓源氏の女子の次に柄子女王・厳子女王・昭子女王の三名が記述されている。頭注に「按、柄子以下三女、源氏系図為能有之子」とあることとあわせて、三名がいずれも〈女王〉であること。『尊卑分脈』は文徳皇子源能有女となつてゐること等から、これら三名の女王の実父は源能有であり、何らかの理由により、『本朝皇胤紹運録』では祖父文徳天皇の養女であるとなしつてゐると解釈される。しかしながら、これら三名の女王を文徳皇女とする資料は『本朝皇胤紹運録』のみであり、文徳天皇崩御した天安二年(八五八)の時点で、源能有は十四歳であるので実際に養女であつたのかどうか大きな疑問が残る。ただ、〈皇女〉という立場を考える際、この事案はさまざまな意味で検討するに値するのではないであらうか。たとえば、仮に実際に養女であつた場合、文徳天皇の死後にそのような位置づけをする必然性があつ

たことになる。また反対に養女でなかった場合は、『本朝皇胤紹運録』の記述には〈皇女〉に対する人々の見方が反映されていると考えられる。本稿はそうした問題を視野に入れて、あえてこの三名を皇女総覧の対象として考察を試みたものである。

まず、名前の表記と順番であるが、『本朝皇胤紹運録』では柄子・厳子・昭子の順番で表記されているが、『尊卑分脈』では、〈女子〉と表記された横に、厳子・柄子・昭子の順に書かれている。柄子と厳子の長幼および昭子か昭子かという表記が資料によつて異なつてゐる。表記については、本稿では『本朝皇胤紹運録』に准じ、長幼については考察の中で適宜触れていく。

三名の実父とされる源能有は承和十二年(八四五)に文徳天皇皇子として誕生した。生母は伴氏。それ以上のことは不明である。能有の経歴は次に記す。

| | | |
|------------|-------|------------|
| 仁寿 三年(八五三) | 六月十一日 | 賜姓(九歳) |
| 貞観 四年(八六二) | 正月 七日 | 從四位上に直叙。 |
| 貞観 五年(八六三) | 四月 七日 | 次侍從 |
| 貞観 八年(八六六) | 正月一三日 | 加賀守 |
| 貞観一一年(八六九) | 二月一六日 | 大藏卿 |
| 貞観一二年(八七〇) | 正月二五日 | 美濃權守 |
| 貞観一四年(八七二) | 八月二五日 | 參議 |
| | 二九日 | 兼、左兵衛督 |
| 貞観一五年(八七三) | 十月 六日 | 賀茂社使 |
| 貞観一六年(八七四) | 二月二九日 | 兼、備中權守・右大弁 |
| 貞観一六年(八七四) | 九月 五日 | 桓武山陵使 |
| 貞観一七年(八七五) | 正月 七日 | 正四位下 |
| | 一四日 | 左中將 |
| 貞観一八年(八七六) | 五月 八日 | 桓武山陵使 |
| 貞観一五年(八七三) | 十月 六日 | 賀茂社使 |
| 元慶 元年(八七七) | 四月 八日 | 桓武山陵使 |
| 元慶 元年(八七七) | 十一月二日 | 從三位 |
| 元慶 二年(八七八) | 正月二日 | 左兵衛督 |

| | | |
|------------|-------|---------------|
| 元慶 三年(八七九) | 正月二日 | 美濃權守 |
| | 四月 五日 | 使別當 |
| 元慶 三年(八七九) | 八月二九日 | 伊勢内親王 |
| 元慶 三年(八七九) | 十月二四日 | 大和国行幸に奉衛 |
| 元慶 四年(八八〇) | 正月二日 | 兼、近江權守 |
| 元慶 六年(八八二) | 正月 十日 | 中納言 |
| 元慶 六年(八八二) | 六月二六日 | 左相撲司 |
| 元慶 七年(八八三) | 八月二四日 | 伊勢内親王 |
| | | (文徳皇女揭子)陪送 |
| 元慶 八年(八八四) | 二月二日 | 天智山陵使 |
| 元慶 八年(八八四) | 十月 二日 | 大嘗会、後次第司長官 |
| 仁和 二年(八八六) | 六月二五日 | 左相撲司 |
| 仁和 二年(八八六) | 八月一四日 | 伊勢内親王 |
| | | (光孝皇女繁子)の禊に陪從 |
| 仁和 三年(八八七) | 六月二五日 | 左相撲司 |

※この年、大納言

といった話は有名である。政界に対して極めて野心の強い人であったが、それが実現できずに終わった不遇の人でもあった。能有はそうした融に対して、賜姓源氏としてある種の共感を抱いていたことが右の歌から読み取れる。

能有が参議となるのは、六年後の貞観十四年（八七二）である。それ以後は経歴を見てもわかるように、順調に出世し、特に問題は見当たらない。室は『菅家文草』六五九の願文によれば藤原基経女滋子である。『尊卑文脈』の照子（照子）の項にも「母昭宣公女」とある。照子自身、藤原忠平の室となり師輔を生んでいる。源能有の生涯において、応天門の変（八六六）、陽成天皇の廃位（八八三）、阿衡の紛議（八八七）といった政界を揺るがす事件がおこったが、そのどれにも巻き込まれて形跡はない。そのことからしても政治的立場は終始一貫して藤原基経の側であったことは明らかである。

三人の能有女の生没年は不明である。あえてその生存範囲を推定すると、実父能有が元服したと考えられる貞

観四年（八六二）の一年後から五十年とすれば、貞観五年（八六三）から延喜十三年（九一三）となる。『本朝皇胤紹運録』において長女とされる柄子が皇族である貞純親王の室となっているのは、妥当な配偶先といえよう。貞純親王の母は棟貞王女、皇統である。こうしたことから能有が皇族との繋がりを強く志向していたことがみてとれる。

厳子については少々、問題がある。まず『尊卑文脈』では『本朝皇胤紹運録』と異なり、厳子・柄子・照子（照子）の順に記載され、厳子が長女となっている。『尊卑文脈』ではそれ以外の記述、生母・配偶者・子などはない。仮に厳子が長女であると、先に記した実父の元服時の年から考えて、もっとも早い生まれは貞観五年（八六三）となる。

さて『一代要記』清和天皇の後宮の項には藤原高子をはじめ十三名の女御の名が記され、その中に「源朝臣厳子」がいる。厳子の項には「從四位下号温明殿女御」と書かれている。源朝臣厳子については『三代実録』元慶三年（八七九）三月七日程に「季料月俸」を太上天皇（清

和）の勅によって停止されたことが記され、同年六月二十六日程に卒去した記事がある。この源朝臣厳子は『菅家文草』卷十一に「為温明殿女御奉賀尚侍殿下六十算修功德願文」貞観十三年十二月十六日」とあって「弟子女御從四位下源朝臣厳子婦命稽首」ではじまる願文が収められている。いずれの記事にも源朝臣厳子の父に関する直接の記述はない。

この源朝臣厳子と能有女厳子は通常は同一人物として考えられているが、先に推定した能有女の年令を考えると、願文に記載された貞観十三年（八七二）の時点で能有女は九歳となるのでこの当時の女御の年令としては不自然である。仮に能有女厳子が父の元服以前十二歳のときの子とすれば貞観十三年（八七二）には十五歳となり可能性がないわけではない。しかし、そのように無理にあわせて考えるよりは、別人と考えた方がよいかもしれない。厳子の姉妹である柄子は清和男貞純親王の室となっており、また照子は基経男忠平の室である。一代下がるようである。また柄子や照子の記載が残っているのに、能有女の厳子が清和女御であるとした明記した記

述が残らないことも別人と考える要因の一つである。もし別人ならば厳子についてほかに何も記述が残されていないことから早世した可能性が高い。しかしながら、この点に関しては、即断を慎み、詳細を後日に託したい。末子照子は、母方の繋がりが忠平室となったのである。末子でありながら照子についてのみ、母が伝えられているのは、摂関家との強い繋がりを示している。年長と思われる柄子や厳子に母の名が添えられず照子にあるのは異母姉妹であったためかも知れない。

さて、問題は『本朝皇胤紹運録』の記述どおり、この三人の能有女がすでに崩御していた文徳天皇の養女となりえたかである。これよりやや後の時代の養女については倉田実氏の『王朝摂関期の養女たち』に詳しい。それによれば実父が存命中に、すでになくなった祖父天皇の養女になったという事例は小一条院の娘である僖子（藤原道長女寛子所生）があげられている。僖子は内親王宣下をされるに際して、既に三年前に崩御していた三条天皇の養女とされた。これは小一条院男敦貞親王

(藤原顯光女延子所生)に親王宣下をするために計られたことが結果的に異母姉妹である僎子に波及したにすぎないが、実資は僎子について『小右記』に「崩後に生まれ給ふ女王を以て彼の三条院の王子に入れ、親王と為すは、天下必ず言うことあらんや」(寛仁三年(一〇一九)三月五日条)と記している。僎子は能有女と違つて、小一条院の娘である。それでさえ問題視されるのであるから、臣籍に降下している能有女が正式に故文徳天皇の養女になっていたのであるなら、その事例について言及されないということがあろうか。また清和天皇の女御は(源朝臣嚴子)と『三代実録』に明記されている。

この清和女御が能有女と同一人物であり、能有女が「嚴子女王」であるなら、『三代実録』の記載と矛盾することになる。『三代実録』は国史の選者の上首を藤原氏から選ぶという先例をやぶつて源能有がなっている。能有が自分の娘の記述について見過ごすことは考えられない。また同一人物ではなく能有女が実際に故文徳天皇の養女となつて、女王と称されたのならば、そのような破格の扱いを国史に記さないであらうか。皇室にかかわる

重大な事例である。したがつて『本朝皇胤紹運録』の錯誤と考えるのが妥当であらう。しかし、錯誤として切り捨てるまえに、何故そのような記載が生じたかを検討しておくことは無駄ではないであらう。

『本朝皇胤紹運録』の諸本を比較すると、群書類従所収本・京都大学付属図書館平松文庫本にはこの三女王が文徳天皇の子として(女王)として記載されているが、鹿児島大学図書館玉里文庫本では略されている。記載されている写本には系線自体に特に不自然ものはみられない。

実父源能有は九歳で賜姓されているので、その娘は当然のことながら二世源氏となる。しかし『本朝皇胤紹運録』では先の二種の写本はいずれも(女王)と記載している。能有男当時以下六名はいずれも「王」と称した記述はない。この(女王)という記述に何らかの意味があるように思われる。(女王)という呼称は(皇族の女性)という意味を示している。能有は何度も述べてきたように皇族につながる源氏としての強い意識を有し、あわせて藤原北家との関係を維持強化してきた人物であつた。

そのことを考えれば、所生の女子を親王室、あるいは藤原氏嫡流の室とするにあたつて、格上げをはかつたとも考えられる。正式に文徳天皇の養女とはしなくても、自らの娘たちを二世源氏と称するよりも皇孫と称したのではないだろうか。そして同時に相手側つまり藤原氏側にもそれを支持する事情があり、両者の思惑が合致した結果が、『本朝皇胤紹運録』の記述となつたということであろう。『尊卑文脈』では能有女昭子(照子)は忠平室、九条家祖師輔母とされる。忠平には室として宇多皇女源順子もあり、こちらは小野宮実頼母とされる。実頼の母としては、『公卿補任』『大鏡裏書』では宇多天皇皇女源順子とされ、『尊卑文脈』では源能有女昭子(照子)とされるが、『尊卑分脈』は能有女の項では「右大臣師輔母」と記すので内部矛盾を起していることになる。

そのためか通常は実頼の母は源順子とされる。九条家が隆盛を極めるに伴つて、小野宮家との関連もあつて師輔母を文徳天皇孫であると称した方が尊貴性がより強調されると考えられたのではないだろうか。この点については今一人の柄子についても、多少の問題はあるが同様

の事情が推定される。柄子は清和男貞純親王の室となつて、経基王を生んだとされている。経基王すなわち源経基は清和源氏の祖である。後世、源氏が隆盛したときに、始祖の母もまた皇孫であつた面を強調したほうが都合はよい。藤原氏の場合と同じである。

以上、『本朝皇胤紹運録』に文徳天皇の娘として記載される三女王について考察を加えたが、結論としてはこの記述は後世の人々が皇統への尊貴性を重んじた結果生じたものと考えられ、能有の三人の娘が正式に文徳天皇の養女となつたわけではないとするのが蓋し最も妥当であらう。すでに崩御している天皇の養女とする必然性がどこにも見出せないからである。

●注

(一文字昭子)

『公卿補任』は寛平九年(八九七)薨去、享年五十三歳とし、『二代要記』同年薨去、五十二歳とする。一年違いとなる。『尊卑分脈』は『公卿補任』と同じ。よつて本稿では『公卿補任』の年を用いた。
藤原良近女所生

—
藤原今子所生

滋野直子所生

他の二首は卷十四・恋歌四・七三七番歌、藤原因香との贈答歌。卷十七・雑歌上・八六九番歌、藤原国経に昇進の祝いを贈ったときの歌である。

山中裕氏『平安人物志』「源融」

岩波日本古典文学大系による

もつともその隣の「女御源貞子」の項にも「従四位下貞観元年十二月 日為女御同十五年正月薨号温明殿女御」とある。

温明殿には南側に神鏡を祭った賢所（内侍所）がある。したがって清和女御である源厳子と、清和天皇の尚侍でありかつ祖母の妹にもあたる全子の間には相当に深いつながりがあったと考えられる。

倉田実氏『王朝摂関期の養女たち』（二〇〇四年初版・翰林書房）

「以崩後産給女王入彼三条院王子為親王、天下必有言乎」

玉里文庫本においては、文徳天皇の項には、源氏としては能有から富有まで記載され、そのあとに「此外皇子十四人畧之都合卅二人」と書かれている。また平松本は誤字や系統の誤りが目立つので注意を要するとの指摘もあるが、柄子・厳子・照子女王の箇所特に不審な形

—
跡は見られない。

源経基は陽成天皇男元良親王の子であるとの説もある。

● 史料

【柄子】

文徳天皇・・柄子女王（頭注）按、柄子以下三女、源氏系図為能有之子『本朝皇胤紹運録』

能有・・女子（清和御子〔息力〕室 柄子『尊卑分脈』

【厳子】

文徳天皇・・厳子女王『本朝皇胤紹運録』

能有・・女子（厳子）『尊卑分脈』

【照子】

文徳天皇・・照子女王（右大臣師輔母）『本朝皇胤紹運録』

能有・・女子（藤忠平）貞信公室正五位下 昭子右大臣師輔母、母昭宣公（藤基経）女

このおとゞは、忠平の大臣の二郎君御母右大臣源能有御女『大鏡』卷三・右大臣師輔